

Michika Takeda Plays Fryderyk Franciszek Chopin

# Beautiful Nostalgie

武田美千香ピアノリサイタル

All Chopin Program

練習曲より「別れの曲」、「革命」、「木枯らし」、スケルツォ第1番、  
バラード第1番、ポロネーズ第7番「幻想」他

第1292回札幌市民劇場

札幌公演

2012.11月16日(金) 開演 19:00  
開場 18:30

札幌コンサートホールKitara 小ホール

札幌市中央区中島公園1-15 TEL:011-520-2000

東京公演

2012.11月28日(水) 開演 19:00  
開場 18:30

ルーテル市ヶ谷ホール

東京都新宿区市谷砂土原町1-1 TEL:03-3260-8621

全席自由 2,500円 [当日券 3,000円]

チケットお問い合わせ

札幌公演のみ

Kitaraチケットセンター TEL:011-520-1234

<http://www.kitara-sapporo.or.jp/ticket/madoguchi.html>

教文プレイガイド TEL:011-271-3355

<http://www.kyobun.org/playguide/>

札幌・東京公演  
共通

ESI office 担当:清水 TEL:03-5819-2737

[ezer.szep.illat@gmail.com](mailto:ezer.szep.illat@gmail.com)

## 武田 美千香 profile

札幌市出身。札幌大谷高等学校音楽コース(現音楽科)を経て東京音楽大学音楽学部器楽専攻ピアノ科卒業。在学中は播本枝未子、石附秀美、倉沢仁子、森早苗の各氏に師事。

1995年ハンガリー国立リスト音楽院(Liszt Ferenc Zeneművészeti Főiskola)に入学。パラージュ・ソコライ、ジュラ・キシユ、コルネール・ゼンプレーニの各氏に師事し、学院内・外での演奏会をはじめ、ハンガリー詩人や画家との融合コンサート等多数出演する。1997年スイス・シオンで開催されたマスタークラスにてパウル・パドゥラ＝スコダ氏に演奏を高く評価され最優秀者によるガラ・コンサートに出演する。

帰国後は東京、札幌を中心に演奏活動を行う傍ら、福岡にてバレエとの実験的コラボ「ハンガリーからの風」を手掛ける。現在男声合唱団「Arteam」伴奏担当。

第12回ショパン国際ピアノコンクールin Asia 一般部門地区大会金賞受賞、全国大会・アジア大会奨励賞受賞。



Michika Takeda



## Program

ETUDES Op.10 No. 1 C-dur No. 3 E-dur <TRISTESSE> No.12 c-moll <REVOLUTIONARY>	練習曲作品 10 より 第 1 番 ハ長調 第 3 番 ホ長調『別れの曲』 第 12 番 ハ短調『革命』
ETUDES Op.25 No. 1 As-dur <AEOLIAN HARP> No.11 a-moll <WINTER WIND>	練習曲作品 25 より 第 1 番 変イ長調『エオリアンハーブ』 第 11 番 イ短調『木枯らし』
SCHERZO No.1 Op.20 h-moll	スケルツォ第 1 番 作品 20 ロ短調
ANDANTE SPIANATO et GRANDE POLONAISE BRILLANTE Op.22 Es-dur	アンダンテスピアナートと華麗なる 大ポロネーズ 作品 22 変ホ長調
————— 休憩 (15分) —————	
BALLADE No.1 Op.23 g-moll	バラード第 1 番 作品 23 ト短調
MAZURKAS Op.17 No.4 a-moll Op.33 No.2 D-dur	マズルカ より 作品 17 第 4 番 イ短調 作品 33 第 2 番 ニ長調
POLONAISE-FANTAISIE Op.61 As-dur	幻想ポロネーズ 作品 61 変イ長調

## Etudes

練習曲は日本ではモーツァルトと同時代のクレメンティやベートーヴェンの弟子であったツェルニー作曲のものが有名であるが、ショパンは従来の「聴かせる」事が前提ではなかった練習曲を新しいものに発展させた。豊かな詩情、美しい旋律、多彩なハーモニー、リズムや音色に対する研ぎ澄まされた感覚といった、より高度な理解力と表現力が求められる為、各音楽大学の入試や国際コンクールでは外せない課題とされている。ショパンの練習曲は各 12 曲で構成されている作品 10 と 25、3 曲で構成される新練習曲の全 27 曲。彼の良き友人であるフランツ・リストをはじめ、ドビュッシー、スクリャーピン等が特にこの「12」という曲数にこだわり、それぞれ 12 曲の美しい練習曲を残している事からその影響力は計り知れない。

### op.10 no. 1 C-dur (1830年・20歳)

1829 年ワルシャワ音楽院を主席で卒業したショパンは音楽の都ウィーンを旅行する。有名音楽家や音楽出版社との繋がりを持ち、2 回の演奏会を大成功させた結果、彼の名が広く知られる様になり、ウィーンへの移住を決意するのだが、そんな自信溢れる時期の作品である。この第 1 番は単純な調性、同一音型であるにも関わらず微妙な色調を持った作品であると同時に練習曲中最も難易度が高いものの一つに挙げられる。この「作品 10」の全 12 曲は後にパリで知り合うリストに献呈された。何でも初見で弾きこなすリストがこの「作品 10」だけは不可能であった。あまりのショックにパリから一時期姿を消すリストであったが、再び戻った彼は全曲を見事に演奏しショパンを驚嘆させたという。

### no. 3 E-dur “Tristesse” (1832年・22歳)

極めて有名である一方、その甘美な印象が先行しこの曲が『練習曲』である事はあまり知られていないかと思う。ショパン自身「これ程美しい旋律を見つける事は二度とできないであろう」とリストに語ったという。中間部には強烈な減七和音が効果的に使用され、特にその連続使用はリストに大きな影響を与えたといわれている。表題は彼の生涯を描写した映画に由来する。初恋の音楽家コンスタンツァ・グワドコフスカとの悲恋と女流文学者ゾルジュ・サンドやリストらとの華麗な交流が描れており、特にコンスタンツァの別れの場面を効果的に盛り上げる事に貢献している。

### no.12 c-moll “Revolutionary” (1831年・21歳)

ウィーンに到着した若く希望溢れるショパンだったが状況は一変する。ウィーン入り僅か 1 週間後の 1830 年 11 月 29 日、ワルシャワでロシアに対する反乱が起きた為、ロシアと同盟国のオーストリアはポーランド人を危険人物と見なす。故郷を思い煩う彼は演奏会も開けず、金銭的に困窮して次第にウィーンにも失望していく。そして 1831 年 7 月 20 日ウィーン滞在に終止符を打ち、父の故郷でもある芸術の都パリへ旅立つのだが、その途で祖国がロシア軍に鎮圧、陥落したという報せが届く。その失望と憤怒をピアノに向かって吐き出したのが創作の動機との説があり、ショパンの作品には珍しくベートーヴェンを想起させる。「革命」と名付けたのはリストとされている。